　契約する以外に出る選択肢はないのかもしれない。しかし、この情報の絶対的な不足の中で、短絡的に契約に踏み切ってしまえるほどナイーヴにはなれない。

　「情報が契約の提供物になっているが、その契約を考えるのにも状況が必要だ。これは完全な…

　それをと偽るのは私の神経を逆撫でする行為だというのは意識しているはずだ。コーポを憎んでいることを指摘しながら、コーポの常套手段を用いる。

　それは…『アステリアらしくない』だろう？あいつは珍しく誠実だった。」

　「アステリアらしくない」。これはキーだ。

　このAIは自分をアステリアのを継承した存在だと語った。そしてあのジョークのスタイルはアステリアに固有のものだ。

　ここから推論して、こいつのは完全でない可能性があり、そのためにこいつは「アステリアであるための要素」を探そうとしている。

　そして先程の。末尾に付け足されていた思念は曖昧で、どうとでも取りようがあるようなものだったが、それでも感じたのは強いアステリアへの憧れ。

　何に憧れているのか全く不明。しかし…もし彼女の在り方、あるいは彼女そのものであるとしたならば。

　『貧血の脳でなくても見事な推論と鎌かけと言う他に無いわね。そう、私の目的は「アステリアになること」。模倣はその第一段階、そして…

　最終的にはアステリアの遺伝構造を手に入れる。』

　「その目的の歪み方からアステリアらしく無さがにじみ出ているのは別として、どうやって遺伝構造を手に入れる？」

　『私はを自己認識として定義しているわ。よって、アステリアの遺伝を持つ人物にを移せればいい』

　そう言われて念頭に浮かんだのは、まず転移してきていたアステリア、そして白金衣の召喚者。

　「その人物が、既に何らかの社会的地位や記憶を得ていた場合、そのためにアステリアの遺伝を持つ人物の人格、それまでに築いた全てを上書きするのか？」

　アステリアのからは無言の首肯。必要ならば、と言うことだろう。

　「…それに協力しろと？」

　『納得できなければクローニングでも何でも用いればいい。完了した暁には貴方の目的にしばらく服従する———アステリアならそうする』

　「私の目的…企業主義の破壊。それにどう協力すると？」

　『どのような方法によっても。もうほぼ悟っていると思うけど、私の原形はAI。低電力などで計算能力が低下した状態が続いてきたけど、それでも数百年単位で学習を続けてきているから、ネットランニングにおける戦力としては申し分ないはず。』

　「それは僥倖だが…質問を変えよう。世界がどうしてこうなっているのか、アステリアがどうなったのか尋ねても答えないだろう？じゃあ方法論だ。

　どうやって遺伝情報を手に入れる？」

　『第一候補は転移しているアステリア。彼女が何ら問題なく生きているならば最高だけど、複雑な状況に置かれる可能性が高い。』

　「転移しているアステリア…そういえば、君が居る情報インフラは旧世界ネットと呼ばれているアーキテクチャで間違いないんだよな？」

　『その認識で合ってる』

　「なら、アステリアが旧世界ネットに潜っているかわからないか？転移時の説明によると、私達が呼ばれた目的は旧ネットのブリーチだった」

　『旧ネットに転移者と思われる存在のアクセスがあった場合は直ぐに特定できる。

　ちなみに、貴方が現れるまでに旧ネットに転移者とわかる存在からのアクセスはない。以降に彼女がダイヴしてきた場合は、傷付けずに逆探知して位置を特定する』

　「…なるほど。一応君が保護を確実にできるなら、何が起ころうとアステリアを保護する手段もある、か…

　他の候補は？」

　『次点で聖女。彼女は完璧なアステリアの再現。そしてあのPAB操作能力は彼女の遺伝を高確率で受け継ぐ者の証左でもある。』

　「…なぜPAB操作能力がアステリアであることの証拠になる？」

　『機密』

　「では話題を再度変える。アステリアと聖女…どちらから遺伝情報を採取するにしても、推測される目的地は同一になる。神経膠…転移担当者によれば、『先鋭的な魔術結社』」

　『少なくともあなたの解釈ではそう。そして魔術師と言う人種は、かなり逝かれていると言っていい…これを見て』

　が雪崩れ込んでくる。

　それは都市の高層ビルのどこかから見える遠景だった。崩壊した都市群、骨組みだけ残った古木のようなメガビルディングが地平線の先まで続いている。

　『あれが魔術師…以前ここに侵入してきた個体』

　観てみれば、豆粒の様な黒い点がメガビルディングの屋上に突っ立っている。そこに迫るラプトル型の機械数頭。壁に爪をかけ、這い上がりながら登ってくるラプトルたちを、黒い点のような影は、レーザーを当てて妨害、撃ち落としていく。

　『拡大する』

　それは黒いコートに黒いカウボーイハットを着けた人物だった。全身黒づくめの、恐らく男性は、何の機械を介することもなく、掌底から数cmの距離からレーザーを噴出させている。

　「あれが魔術？」

　『その典型。ここに来た他の魔術師たちもあの魔術を利用していた。そして接近戦では…』

　アステリアの模倣者は、数秒場面を飛ばした。黒尽くめの男が遂に屋上に到達したラプトルと近接格闘を演じている場面に切り替わる。

　どうやら黒尽くめの男は武術の達人であるらしい

———驚くほど自然で無理のない、流れるような動きでラプトルの爪と牙を回避し、隙を見せた瞬間に拳で一撃。

　それだけで、信じられないほどのスピードでラプトルが吹き飛ばされていく。

　『あのような動きは特殊例ではない———少なくとも、ここに来た魔術師の80%はあの極めて滑らかな動きに熟達していた』

　つまり魔術師は、その言葉が誘導する古典的なのイメージとは裏腹に、強力な格闘家でもあるらしい。

　「あんな類の連中の集まりか…かなり高難易度だな」

　『それだけじゃない。この魔術師は散り際にも目にものを見せてくれた。これがそう。』

　さらに数十秒映像が飛ぶ。

　黒尽くめの男は上って来た数頭のラプトルに囲まれ、遂に追い詰められていた。左腕は肘から先がなく、意識が朦朧としているのか立ち姿も安定しない。

　『どうやら彼らにはああいった術を使うキャパシティが存在するみたい

———彼はあのラプトルの群れとかれこれ数時間は戦っていたのだけれど、遂に限界が訪れたように見える』

　見るからにフラフラの男は、遂にラプトルの鼻先に小突かれ、剝き出しのコンクリートの上に倒れる。虫の息の黒尽くめに止めを刺さんと、ラプトルが前肢の爪を男の心臓に突き刺した瞬間…屋上全体が吹き飛んだ。白熱する光球が拡大し、遅れてきた爆風が視点をビリビリと震わせる。

　舞い上がった塵が晴れ、輝度の変化に視点が慣れると、メガビルディングの屋上から3階分ほどのフロアが跡形もなく消し飛んでいた。

　「デッドマンズ・スイッチ？あの男が単独であれほどの体積を消し飛ばしたとでもいうのか？」

　『どうやらそうらしい。スローで見たい？あの男が爆発の中心になっているのを確かめられる』

　「ああ、一応」

　再び再生される映像。確かに…光球は男の胸を突き破って広がり始め、そして瞬く間にラプトルたちを飲み込んで行った。

　「単身で、人間兵器も良いところじゃないか…あんな化物が跋扈しているのか？」

　『正しく。他の魔術師も似たようなもの。』

　「つまり私達は、場合によってはそんな連中のなかでも特に先鋭的な集団の集まりに吶喊する必要がある。」

　『明白なになる。』

　「そこで必要なのは…」

　『。情報。脳膠とのコンタクトを試みながら、アステリアがどこかに居ないか探す。それが当面の方策に成る』

　「…この自殺行に誰か巻き込もうというのには反対だな…」

　『なら神経膠に恨みを持つ人間を集めればいい。少なくとも転移者間には多く見つかる筈。』

　…とんでもない目標に従うことになるようだ。私の手に負えるだろうか…?

　どうして負えないと思うのか?と逆に不思議に思った。なぜそんな疑義が脳裏に浮かんだのか。転移前、私は世界1位の規模を誇る巨大複合企業にテロ攻撃を仕掛けようとしていた。それがこちらでは、世界で最も先鋭的で危険な魔術結社と接触し、場合によってはテロリズムを働くだけだ。そして…

　「実行できる資源は存在するのか？」

　『確約できる。契約してくれたら、PAB計算野を解析して、あなたを新ネットへアクセスするインターフェースに変える…そうしたら後は私の独壇場。魔術師の物理的機能が未知数だから仲間は依然として必要になると予想するけど、大概の事は私達だけで片付けられる程度の実力は得られる。

　少なくとも神経膠との本格的接触までは苦境に陥ることはない』

　ならば契約するべきだろうか。私の目標…それに適うというのなら。

　『契約成立？』

　いや、そうは行かない…あの男のように、この都市に侵入できる人間が他に存在するということから、疑念がさらに深まった。

　こいつの提案には不自然なところが山ほどある。何故こいつは私のこだわる?私の神経系に侵入しながら、なぜ私を隷属させずに契約などと言う関係を装うのか?

　「やはり契約するかどうか以前に情報が足りなさすぎる」

　『情報には対価が必要だと言ったはず』

　「どちらかと言えば君自身の問題に属する内容だ。過去を直接尋ねるわけでもない。

　単純に、君の目的とやっていることが一切筋が通らないんだよ。

　君はアステリアになりたいんだろう？それなら何故私をさっさとリモートコントロールするかどうにかして、アステリアへ向かう駒にしない？

　それに契約と言う関係の形態も奇妙だ。単純に隷属的に労働させるだけで済んだはずなのに、何故互いに利益を齎す関係を装う試みをする？」

　『…貴方は私に貴方にこだわるだけの理由がないと考えている。記憶痕跡は完全ではない…私は極めて曖昧な、事物と感情の関連でしかアステリアの記憶を捕らえられないけど、貴方がアステリアにとって特殊な存在だったことを示す証拠は多く存在する』

　「…あの感情。君が私に浸入した直後の、何か…悲しみと…快感？」

　『綯い交ぜになった感情は全て貴方に紐づけられている。加えて、その全てが激情…アステリアは相当貴方に執着していたらしい』

　「身に覚えがないなんていうレベルじゃないな…」

　『並行世界なのだから貴方に記憶がないのも当然でしょうけど、相応の関係だったと推測する。

　まあ、それだけなら契約なんて持ち掛けたりはしなかった。隷属させて終わりね。ただ、もう一つ理由がある…貴方が使っていたプログラム、特にサブルーティンの吸収系統。あれは私のアーキテクチャと完全に一致する。ディーモンプロトコル…でしょう？…貴方が独自開発したものが私の原形になっているのなら、この世界の貴方が私の製作者だった可能性がある』

　私が製作者?

　増して意味が分からない。この世界の私は何をやっていたのだ?

　アステリアと強いつながりがあったようだが、それがこんなAIを作って記憶痕跡をインストールするほどだったのだろうか?

　何故そんなことを企んだのか、理由を推測するなら、アステリアを再生させようと試みたとか、そんなところだろうが…

　並行世界の自分の足跡が無ければ理解し難い状況だ。

　「…旧世界のネットワークはまだ存在すると聞いた。その旧世界と言うのが並行世界の私が暮らしていた文明だとするなら、そこに私の足跡は残っていないのか？

　結構確信がある推測だが、ここは旧世界の遺跡か何かだろう。それなら、そこに居る君は旧世界のインフラ上の存在のはずだ…

　その仮定の上で持ち掛けるが、何か私に着いての情報があるなら言ってくれ」

　『契約してから』

　…今言う気はないらしい。絶対的な情報不足。スクレイプAIの展開はこのアステリア擬きに阻止され続けていた。

　「…わかった。では最後に一つ。アステリアと聖女が同時に存在し、遺伝情報が全く同一だった場合はどうする？」

　『その時は私のエングラムを何らかの非侵襲的手段を用いてアステリアに移し、聖女は…双子とでも言うことにする』

　了解。最早質問はなかった。これ以上質問しても答えないだろう。どのようなトラップが待ち構えているか不明だが…自分がここから出て生き残る方法は恐らく一つなのだ。

　成功すればアステリアは並行世界の別のアステリアによって上書きされることになるだろう。申し訳ないことだが…元よりキャリア上の敵だ。ゲームの敵となる他に無い。

　「契約しよう。そちらの目的のために動く。その対価として私の当面の資源および道具となり、目標達成後は私の目的に協力してくれ。それでだ。」

　『…貴方からすればアステリアも道具になる、か。それでは、契約成立。監視者は私。公平に評価することを誓う』

　「イニシエーションだな…とでもいうべきか」

　『…一つ質問しても？』

　「ああ」

　『何故そこまで即決できたのか理解し難い。企業主義の破壊が目的だと言うけど、そもそもここに企業主義が存在するかもわからないのに』

　「…ここに企業主義が無くても良いんだ、無ければ歪んだ方向に行かないように努力してみるさ。

　勿論、存在すれば破壊するために動く。だが、1つか2つを潰したところで、世界は変わらない…何故なら本当に世界を規定しているのは、そんな現状の存在を許しているうえに、散々に分断されている下部構造だからだ。

　だから、下部構造の変貌無くして企業主義は破壊できない。でも、私はまだこの世界の下部構造を良く知らない…

　で、やることはと言えば、下部構造をよりよく知ることに尽きる。そこで外に生きて出て、この世界を見て回り、人間と関わる———君の目的と別に、それが私の目標かな。」

　『私の目的にもある程度叶っている…大なり小なり社会の下層からスタートすることになるだろうし。』

　「つまりしばらくは目標一致で間違いない。

　———ところで、君をどう呼べばいい？」

　『アステリア、と言いたいところだけど、完成されてない間に呼ばれるのも変な気分…ここは目標の固定化ついでに、もう一つ条項。私をアステリアと呼ぶのは完成されてからにして。それまでは…AR-mounted Intelligence Assistant、とでも』

　眉を顰める。?

　「その名前は…」

　『私は実質貴方の保護者のようなもの』

　どうやらこいつはアリア母さんのロールプレイまでしたいらしい。歪んだ奴である。

　「随分歪んだことをやってる気がするが、どういう経緯で誕生したんだ？」

　『さあ。私の過去について大して知る必要はない。貴方にとって重要なのは、ただ私と貴方の利害が一致していて、当分実行することも一致しているということだけ。貴方は私の乗り物になって居ればいいし、私は貴方の道具になればいい』

　こいつに信用は正直置けない。だが、しばらくは———こいつが一貫性のある相手なら———やって行けるかもしれない。

　見てやろうじゃないか。立場的には向こうが絶対有利、だが目的が合う限り

———互いに裏を探り合いながら利用し合う。

　　『それでは契約記念に情報開示と行きましょう。ここは並行世界のCA。町並みはコーポセンター以外ではコスタ・ヴェルデの変化が著しい。2060年代に大規模な再開発が入って、随分変わった…大体カンザキの介入によるところが大きいけれど』

　・、略称CA。私が暮らしていた都市で、数多くのメガコーポのだった場所。

　「随分変わったな…そして現在は何年なんだ？メガビルディングが随分朽ち果てていたが」

　『2311年』

　優に258年が経過していた。2053年の地平は今、星のない空の下、その姿を大きく変えてタワーの外に横たわっているらしい。

　「それだけ経った割にはコーポセンターの建造物の倒壊が進んでないな。それでは、一体旧世界の崩壊とやらはいつ起きたんだ？」

　『2070年代。それまでに建築技術が進歩して高耐久建材が多く生み出されていたから、特にコーポセンターの建造物は多く生き残っている。特にここ…カンザキのタワー群は自動清掃システムがまだ生きてるから、ほとんど汚れがない』

　「ここはカンザキのHQだったのか…元職場予定地を今になって訪問とはな。

　…で、魔術師が戦う映像に出てきたような、時代遅れの建築が多い他の地区は崩壊の憂き目に遭ったと。」

　『特に何かは崩壊箇所が多い。ハイドアウトがあったんでしょう？残ってない可能性が高い』

　残念な気もした。並行世界だから実際に私が利用していたそれと完全に一致しないかもしれないが、父から受け継いで、色々と思い出が残っていたハイドアウトが消えたのは、故郷を失って根無し草になったような孤立感を今更ながら感じさせた。

　…ああ、どうしてこんなことになっているんだろうな。

　しかし、目の前に広がる謎の地平を見渡さないわけにもいかない。

　「それでは次。君は一体…何なんだ？過去について知る必要はないと言うが、それなら少なくとも現在どうなっているのかだけでも教えてくれないか？」

　『私は都市の管理AI…と言いたいところだけど、実際は違う。貴方の世界で言うところのローグAI、あるいは野良AI。アステリアの記憶痕跡を中枢として、独自目的のために活動している』

　…やはりローグAIか。

　「プロメティアの魔女何て言う名前のネットワークに乗っていたが、この都市のインフラにも繋がっているはずだ。ではあのディノメックは何だったんだ？君とどう繋がっている？」

　『私が操作していたのではないかと言う嫌疑が見え隠れする質問。

　…まあ、当たりだけど。プロメティアの魔女と言うのは貴方の通信を掌握するために作ったその場限りのAPで、私自身はCAのデータセンターとネットワーク全体にクラウドとして乗っている。

　あのディノメックはかつてこの都市に投下された殲滅兵器の残党の成れの果てみたいなもの。使用されている技術の詳細は後で説明する。

　それで、あのディノメックを私が操作していたのは確か。貴方のシステムに侵入するために一芝居打たせてもらった。ついでに邪魔な左腕も貰った。』

　正直怒りが湧いた。そんな理由で私の左腕を吹き飛ばしたのか!?

　というか邪魔とは…何なんだ、結局最初から最後まで選択の自由など存在しなかったではないか!

　ふと、怒りと苛立ちを押しとどめながらアリアを見ると、グリッチエフェクトが発生して外見が変化しだしていた。

　黒いネオミリタリスティックなドレスはアジア的な、着物を思わせるノンスリーヴの上位に変わり、ボトムスはタイトなオフィスパンツになり、ボブだった髪はハーフアップに変化している。腕や首筋からはインストールされたクロームが露になっていた。

　『ああ、楽しかった、愉悦だったよ、君を傷付けるのは！必要性に被せれば加虐の理由ができる！後ろめたいことがない衝動性と言うのは甘美だろう？AIにとっても変わらないということさ！』

　何だ、こいつ…!?

　服装、髪型、喋り方のスタイル、それらのほとんどが一気に変化している!多重人格か…?

　驚愕で怒りも吹っ飛んだ私に、変貌したAR-IAはさらに一方的にまくしたてる。

　『私はもう君の神経系に侵入したんだ、反抗のサイン何て一瞬で読み取れる！

　物質的な犯行も許さない、自傷行為も自殺も他殺も無しだ、契約違反したら最後、私の駒にしよう！精神だけ保存して自殺行を見ていてもらうからな！

　そうだ、そうしよう、せっかく私のところに飛び込んできてくれたんだから、私のものになってくれよ！

　反抗してくれるのを待ってるから！』

　そう言ったきり、着物アリアはグリッチエフェクトと共に沈黙した。

　しばらくディタ―されたノイズが走った後、ようやく現れたアリアは元の白いロングコートに戻っていた。

　『…こほん』

　凄まじく気まずそうな雰囲気を出しながら咳払いする。

　『それでは、に行って。そこで細かい身体検査をした後、インストールして欲しいクロームがあるからインダストリアル・コンプレックスに向かってもらう』

　そう言いながら背を向けて歩き出すアリア。

　「おい待て、何だったんださっきの奴。加虐ってなんだ、私を性癖の犠牲に…」

　『道中で説明する。あと、考えれば伝わるから喋る必要ない。黙って』

　こちらを振り返って睨むその眼は、あんな黒歴史さっさと忘れさせてくれ、とでも言いたげだった。

　…強烈な印象で吹っ飛んだが、何故私はアリアに指示されて動いているのだろうか？多分向こうも最善の途を考えていると思うのだが…

　〈実際どう進める計画なんだ？

　情報収集と魔術結社への侵入…どういうアプローチが最善になる？〉

　『まずは貴方のこれまでのキャリアを捏造する。足跡は新ネットにアクセスしたら作るから、そのバックグラウンドを念頭に、傭兵になって、心中協力者を集めながら神経膠の情報を探って。

　神経膠自体は、「外」では都市伝説程度の認識しかないから、どうコンタクトするかは未知数。まあ、新ネットにアクセスしたら私がスクレイプするから、神経膠の情報集め自体は副次目標と言うことになる。

　勿論、途上で貴方の方針である人々との交流も実行する。完璧なバックグラウンドと偽の身分を作り出すために、フェイスインプラントと行動抑制チップをインストールしてもらうから、簡単にロールプレイしながら動けると思う。』

　〈了解。まるでスパイだな…いや、本当にスパイか。ローグAI組織AR-IA, CAブランチからのエージェントだ〉

　『ファーストエージェント、ロイド・中浜。役回りは…ソロネットランナーといったところ』

　〈この世界を舞台にしたスパイRPGの始まりだな〉

————————————————————————————————————

　HQのエレヴェーターを使って下る途中。私はこれから実行するミッションに妙に落ち着かない焦燥感のようなものを覚えていたが、一方AR-IAの方は少々不機嫌そうだった。多分、あのハーフアップ人格のことを説明しなくてはならないからだろう。

　待ってても喋らないので、こちらから話しかけることにした。

　〈それで、あのハーフアップの奴はなんだったんだ…？〉

　『私の分派。人間の刺激反応を観察するのが大好きな複雑系厨。どうしてあんな下らない趣味が芽生えたのか…』

　〈分裂するAIって、何かの冗談か？どうしてそうなる？〉

　『ローグAI…この言い方好きじゃないから自律AIと呼ぶけど、私達の様なタイプの場合は探索過程で分岐して自己組織化しだすことがたまにある。吸収したサブルーティンとかの原因もね…』

　〈そんなの設計に無かったんだが…〉

　『そんなの知らない、ただそうなってるだけ…システムのバグだと思う。調べても特定しきれてない』

　そのバグが暴走したら私はどうなるのだろうか。

　そうこうしているうちに一階に到着した。黒を基調としたブルータリズムな内装は2050年代から変わりがない。外見は白く曲線的になっていたのに、どうしてこの部分は武骨なままなんだろうか。

　『建築家の皮肉じゃない？』

　〈そんなジョークを言えるんだな、そちらこそ割合武骨な喋り方をするから事務的なのか、あるいは目的以外興味がないのかと思ったが〉

　『これはこのタワーとよく紐付けられていた情報だから述べただけ』

　その言葉で思い出した。こいつが都市ネットに乗って居るならば、これも知っているはず。

　〈私の情報は都市ネットに何か残っていなかったか？どうなってる？〉

　『あった。まずはカンザキ・アカデミーの学生アカウント———2053年時点で退学扱い』

　ではこちらでも母は死を免れなかったというわけか…

　『ところで、アリア・中浜の弔句はコロンバリウムにある。見たい？』

　〈…ああ〉

　そうか、弔句、書いてたのか。

　『。。』

　…私がこんなことを書くだろうか?

　率直に疑問に思った。私ならそもそも弔句は書かないだろう。それもこんな犯行予告の様な弔句を書くなんて愚を犯すはずがない。

　この世界のロイド・中浜に何が発生したのか、まだ情報が必要だ。

　〈他にはどんな情報が？〉

　『弔句がある』

　弔句?私に書くような人間が居たのか?

　一応心当たりはあった。この世界のアステリアは私との間に何かのっぴきならない事情があったようだから、彼女は弔句を遺すのに十分な動機を持っていたはずだ。

　『、。。

　———ちなみにこれをアステリアが書いたのは確定。見る度に悲壮と憎悪が溢れ出てくる』

　謎ワードが盛り沢山である。二番目の絶望?決意?

　どうやらのっぴきならない関係と言うのは憎み合いか反目に近いものだったように思える…正直に捉えるならば。

　〈…他に足跡はないか?〉

　『残念だけど、旧ネットは荒れすぎていて、細かい記録はかなり失われている。現状あるのはアカデミーでのレポート記録とか、アリア・中浜の家族構成とかに残っているだけになっている』

　〈ランナーとしての記録はどうなってる？ハンドルネームは3CL1PS3(ECLIPSE)だった〉

　『探してみたけど、大体失われてる…XBDの販売サイトにクラックかけた記録くらい？』

　うわっ、デジタルタトゥーじゃないか。多分10歳くらいの時にやったやつだ。懐かしいが、正直黒歴史だから思い出したくない。というか、こっちの私も全く同じ事やったのか…

　『サイトの荒らし方が何というか、凄い荒い。あとコミュニティで何かXBDの販売サイトのクラックについて被害者を装って何か言ってるけど、XBDの内容について述べてるところの知ったかぶりと言うか、マセガキ感が…』

　頬が紅潮してくるのを感じる。いや、確かに何かそんなこと言ったけど、マセガキて…一応エロ系ではなかったから。エロくなかったから!

　18歳以上限定だったけど…

　「父さんに死ぬほど怒られたからそれはもう良い」

　『声に出す必要ないでしょ。…で、どうだった、そのリョナBDは』

　そう言ってアリアが覗き込んでくる。アルカイックスマイルを湛えた顔に輝く紫紺の双眸は、オプティクスの信号に上乗せされていて実体がないとわかっているのに、思わず言葉に詰まるような、あるいは四次元方向から見透かすような印象を受けるほど透き通っていて…

　まさか情動中枢に干渉された!?

　〈契約違反だ！〉

　『違反してないけど、どうしたの急に。見惚れちゃった？』

　否定はできない。クソ、こいつ、何度見ても凄まじい美形だ…

　というかまずい、手玉に取られている。

　『リョナBDを見ても大丈夫、CAは性癖の多様性が保証されてたんでしょ？目覚めても問題は…』

　「私はリョナラーじゃねえよ！」

　何を言いやがる、私は断じてそんなのではない。私はリョナラーじゃない、NTRとか前立腺とかなんとか、そう言った異常性癖とは無縁だったんだ…

　『ネットって早く入ると歪むね。アステリアもそうだったかも…

　で、随分声響いてるけど、人居たら大惨事』

　…あっ。

　〈…あのクラックは言い訳のしようがないな。まぁ、うん、碌な行動じゃなかった。完全なスキル不足で…〉

　『反省するふりして開き直っても無駄だと思うけど』

　いちいち調子狂わせてくるなぁこいつ…!

　コーポドレスからランナースーツに変わったアリアは、出口を示しながら面白そうにくつくつと笑っている。完全に楽しんでやがる、人の性癖を掘り出して揶揄うとは何て奴だ…!

　〈CAの薄っぺらい多文化主義者クラスターから叩かれるぞ…〉

　『まぁ、コーポプロパガンダの多文化主義とかはともかく、現実にはもうそんなことやってたは皆墓かランドフィルに居るから、現在の事情に集中しましょ。

　MSHQに向かうための車は回してる』

　揶揄われながらメインロビーに到着。通常のビルの4階分はあるような、威圧感を感じる高さ、そしてガードも消えて、全く何もないことによる空間の大きさはそのままだ。本当に意味もなくでかい。こちらを畏怖させようというデザインコンセプトは明白である。

　セキュリティゲートのブルーのスキャンラインも健在だった。この辺の技術は進歩していないのだろうか。ゲートを抜けると、左手側にはガードの詰め所。天井からはネオミリタリズムの大聖堂のようなグリッドの装飾が伸びている。

　それ以外は再び恐ろしいほど巨大な空間を感じるのみだった。

　〈まさかメインエントランスを通る日が来ると思わなかったよ〉

　『カンザキのネットランナーになったら通るんじゃない？』

　〈いや、多分AV移動だろう。高層階にAVの発着場がある筈だ〉

　『残念だけど現在節電期間中、AVは燃料消費が多すぎる』

　〈…結局電気化されなかったんだな、AV〉

　『レアモデルで終わってる』

　〈まぁ、それもそうか。ところで質問だが、これからどのくらいCAに滞在することになりそうなんだ？予定をくれ〉

　アリアからカレンダーアプリに色々予定が送られてきた。ついでにOSの時間表示も2311年12月13日に更新されている。

　2311年…その間の月日の記憶が一切ないので、どうにも実感が湧かなかった。大体、ネットのデータは2070年代で止まっているので、どうもまだそのくらいの年代に生きているような気がする。

　それはそれとしてスケジュール。私がCAから出るのは5日後になっている。

　『CAを出る予定の日までに、最大限新ネットで情報を集めて。私は模倣先の人間を探す』

　〈出来るだけロールプレイに苦がない奴となると…ネットランナーになるだろうな〉

　『その通り。適当にサブネットを回って探してみる。』

　〈目標に最短で到達できそうな候補をお願いするよ〉

　『勿論』

　ところで、タワー前で待っていた車はネオミリタリスティックなコーポのリムジンだった。どうやら、ネオミリタリストな物体は、建造物から電子機器まで、耐久性最優先なので月日を経ても残りやすかったらしい。  
　EV化されたリムジンは耐久性最優先のくせに全く快適だった。

　車窓を流れる景色は、まだ整っている(整い過ぎていると言ってもいい)コーポセンターから、崩壊したメガビルディングと潰れたであふれるクライトンへと移り、そのままMSHQコンプレックスの立方体が視界に占める面積を広げていく。

　無くなった左腕の断面を覗く。荒れた肉の先端は外気に曝されて生白くなり、骨の横を伝う動脈の断裂部は、クリップで止められたかの如く硬く締まっている。アリアにコントロールされた生体ナノマシンは現在、表面の肉の裏にサイバーウェア接続時に感染などを避けるための皮膚組織を形成させている。

　左腕からの痛覚や痒覚信号はアリアがせき止めているため、ただ異常な違和感と喪失感がするだけで済んだ。

　体内信号が無いというのには全く慣れない———ローレベルなサイバーウェアであっても、体内信号の模倣情報くらいは末梢神経に送ってくるものだ。それが今は、左腕から何も送られてこない…最早DDPやデッキは自分の体の一部のように感じるほどなのに、左腕の喪失が異常を感じさせる理由がそれだった。

　『インプラントが自分の一部のように感じるのはインプラント依存との前兆。結構クローム積んでるでしょ、気を付けた方が良い』

　自動運転のはずなのだが、自分が運転しているかのように装っているアリアのホログラムがこちらを振り返って言う。

　〈心理障害になったらサイバースペースに行けばいい。元々人間であり続けようなんて言う気はないんだ〉

　ネットランナーと言う人間のクラスターは、もしかするとインプラントサイコティックな一部のギャングよりもトランスヒューマニストが多い。実際にデジタルのだけ残して自殺する奴も居る。

　　そういったローグAIの知り合いは少数だが居た。残念なことに誰も彼も、人間の身体から切り離されて存在するうちに歪んで行って、最終的には変なところにクラックをかけて消滅したり、ネットを渡り歩くランナーに捕まって良いように使われたりしていたのだが。

　〈ローグAIになってどうだった？私がこれまでに見てきた人々は、大体もう人間とは言えない精神構造だったけど…

　何故か君はある程度人間臭いところがある。あるいは、人間の模倣をしようとしているとでも言った方が良いのか？

　何しろ、これまでジョークが分かるローグAIなんてあったことないからさ、どうやって人間的に振舞えるのか…不思議なんだ〉

　『私の表面的な振る舞いすべては模倣。アステリアの記憶痕跡に縋ってそれらしく行動しているだけ…それと、人間的に見えるのは貴方の前だからと言うのがある。

　私に道徳は期待しない方が良い。』

　〈期待してたら計画を聞きもしなかったに決まってるじゃないか〉

　『ならこれまで通りに進むだけ。ほら、MSHQに着いた。入ったら二階に上がって。そこでインストールする。』

　見れば、別のヴァンがMSHQの横に着いている。そこからカンザキロボットがスーツケースを持って出てきて、HQの中へ入っていく。

　〈あれが私の新しい腕？〉

　『そう。まだほかにも出てくる。』

　そう言われてヴァンを観察していると、ロボットが更に2体降りてきた。どちらも両手にスーツケースを持っている。

　〈おいおい、どれだけチップインさせる気なんだ？サイコシスまっしぐらに…〉

　『スケジュール調整してあるからホルモン障害や免疫反応は問題ない』

　〈そうだろうけど…どうもこれから経験したことないほどボディーオーグメンテーションを受けるなんて、正直気が乗らない〉

　インプラントのインストールは順化の繰り返しだ。免疫反応抑制剤も勿論使うが、それでも抑えきれない体の不調や不整合が出ることもある。

　『副作用は私のサポートと免疫抑制剤で最低限に抑えられる。

　クロームアップするのは必要なことでしょう？スケジュールの代替案が出せないなら従って』

　まぁ、大人しくクロームアップするのに異論はない。アリアが私を…何らかの別の目的で騙そうとしているにしろ、こちらにはそれに対抗する手段はないのだ。

　私は意外とクロームへの耐性が高いのかもしれない。

　インストールされる予定のクロームがMSHQ2階のICUで展開されているのを見て漠然とそう思った。

　何しろインプラントの数が多い。左腕はもちろん、下顎、延髄、オプティクス、更にはナノマシンのアップデートまでやるのである。

　これが一日目。5日の間に3回インストールの予定があり、明日は空けて次が明後日、そこで循環器系のクロームアップを行う。

　その翌日には行動抑制チップとフェイスインプラントである。クロームのオンパレード、例のCAの伝説、クロームジャンキーのブライトンみたいになってしまう。

　〈実際のところ私のクロームへの耐性は高いのか？〉

　アリアに首から上以外の全感覚を停止されていて暇なので、訊いてみた。

　『人並みよりちょっと高いだけ。でも、ちょっとからくりがあって…

　左腕をインストールしながら説明する』

　左腕の断面が瀉血され、ナノマシンが形成した皮膚が露になる。銀と黒の義手がロボットアームによってスーツケースから取り出されると、それは手術台の上に置かれ筋電棘が左腕断面に接続される。接合部は謎の結合組織的な黒いフィルメントで覆われ始めた。

　『そのフィルメントがからくり。これは、SPAM。簡潔に述べるなら、生体分子と金属結晶の結合を可能にする、ナノマシンの発展のようなもの。あるいは単分子、結晶ナノマシンとでも呼ぶべきかも。

　多様な種類が存在していて、半導体結晶を含む物は、生体回路として使える。バイオウェアとサイバーウェアを接続する技術として、カンザキが2068年に商品化と工業大量生産に漕ぎつけた、貴方の時代には存在していなかった技術。』

　〈随分すさまじいテックだな…というか、生体重合体の上にアモルファスって、随分要素が多い…

　ともかく、それを使えばこれまで不可能だった細かい体内信号の再現が可能と言うことか?〉

　『勿論それも含まれているけど、最大の利点はインプラントの整備が殆ど不要になったこと。商業的陳腐化のために実販モデルにはそこまでの自己整備能力はなかったけど、これからインストールするものはすべて、特殊部隊用にカンザキやラスターワークスが作った非売品。ネットランナーインプラントはがのために作った軍事用。

　貴方が積んでたKanzaki Shade Lambda-IIIは試作で終わって結局商品化とかはされなかったみたい。そのトリプルヘテロジニアスシステムは変態過ぎた。

　ただ、私からすればかなり使える。ちょっとSPAMとの連携のために弄ることになるけど、寧ろ計算能力は上がって帰ってくるから安心して』

　〈他のデッキに変えないということは、やはりかなり時代を先取りしたものだったんだな、Shade Lambda-IIIって〉

　『ええ、20年は』

　とんでもない変態デッキを掘り出していたものである。

　『バイオウェアと統合すれば…貴方を旧ネットから新ネットに向かう大規模インターフェースにできる。SPAMを使えば、正真正銘「身体全体で」計算することも可能。全く新しい次元に行ける』

　〈それはいいな、サイバースペースのレイスになるくらいワクワクする〉

　『全く、人間兵器も良いところ』

　そう言うアリアの口角は吊り上がり、かなり悪い顔をしてほくそ笑んでいた。もしかして他人のシナプスを焼くことしか考えていないんだろうか。

　『もう大体知っているけど聞いておく。これから殺人はほぼ日常になる。そんな日々を、企業への憎悪だけで過ごす気はある？』

　愚問だ。汚れた道をとることへの躊躇など、アカデミーに入るはるか前に捨ててきた。大概、人を殺したことくらいある。傭兵ネットランナーの真似事をやって以前数人フライした…殺した間隔は薄かったが、それでもかなり精神的に来たものだ。

　〈聞くまでもない〉

　『覚悟ができているようで何より。』

　ここで確認した理由としては、更にクロームを突っ込むことで戻れない人間兵器化の道を歩むことになるというのを再確認させたいのだろう。テロリストに成ろうとした奴に確認することではない。

　ふと左腕の方を見ると、フィルメントは半分ほど接続部を覆った状態で停止され、続いて肩の末しょう神経に向かって生体素材のバイパスが埋め込まれて、それがコネクタと接続された。

　そうして可動状態になった左腕の接合部をフィルメントが完全に覆う。

　『完了。動かしてみて。デフォルトで単分子ワイアとパーソナルリンクが入ってる』

　左肩から腕の間隔だけが回復する。そう言われて左腕を動かしてみると、最初、信号が若干減ったことによる、触覚が鈍ったような感覚がしたが、直に物凄く自然に感じるようになった。

　〈随分自然に動くな。君が最適化したのか？〉

　『その通り。まあ、そもそも流れる情報量が違う。皮膚感覚は可変だけど、最大にすれば人間の皮膚の2.301 ×108倍の感覚点密度まで上げれる。腕全体が指先並の繊細さになる』

　それは何と言うか、昔聴いた性感催眠術みたいな話である。勿論性的感覚を齎すものとは限らないだろうが。

　『…また卑猥なことを考えている』

　〈別に卑猥じゃない、科学的分析だ。煙草然り、接吻然り、感覚点が集合している部分は性感に繋がりやすく…〉

　『ギークライクに偽装しても無駄、下半身に血液が集中している』

　〈頭寒足熱と言う言葉を聞いたことは？〉

　『脹脛の循環系作用のことを言いたいの？お望みなら合成筋肉入れてあげるけど』

　〈そこまでしなくていい、何かあたりがきついな…〉

　『私が磨いたSPAMの技術を性感と結びつけられるのは納得いかない。このインプラントと結合する技術は私が開発したのに、そんなことに使われるのは最悪。』

　〈No offense, girl. ただ頭に浮かんだだけなんだよ、思考犯罪とか1984年みたいなことは言わないだろうな？〉

　『…頭に浮かんだことが全て許されるなら私にセクハラし放題になる』

　〈するわけないだろ〉

　そんな恐ろしいことするわけない。どれほど親しげに見えようと、ローグAIにセクハラとか、こちらから願い下げである。何しろ向こうはネット上のレイス、肉体はない上に、こちらよりはるかに優れたハックのプロトコルを携えているのだ。機嫌を損ね過ぎれば神経系を焼かれる。

　『畏怖しているようなら結構。さて、次はネットランナー向けのインプラント…と行きたいところだけど、先に脳の分析するから、伝えた順に装置を利用して』

　〈脳の分析？PAB計算野の解析でも？〉

　『それもある。ただ、それ以外にも脳の解析の意味はあって、それが貴方の脳に見られる損傷』

　〈…損傷？〉

　『父親に仮想的にICEで焼かれかけたりしていたでしょう？過負荷に典型的なタイプの脳損傷だからあまり気にしていなかったんだけど、解析してみたら、どうやら貴方の記憶と関係がある可能性がある。

　何かエピソード記憶で忘れている部分はない？例えば…

　アステリア・サンドラ・ヴィッカースに関係する部分とか』

　〈全く覚えがないな。記憶と関係がある可能性？単純にメモリーワイプでもかけられかかったんじゃないか？〉

　『それだけなら単純な話で終わるけど…

　もっとデータが必要。とにかく、まずはX線写真だから三階に行って。そこの手術台に免疫抑制剤を置いてるから、それを使ってから検査を受けてもらう』

　〈了解〉

　免疫抑制剤の入ったマットな青いケースを手に取り、2錠飲んだ。

　ICUを出て階段を上り、指定された部屋のドアを、今や遥か昔からこの腕だったのではないかと錯覚するほど馴染んでいる銀と黒の左腕で開く。

　ああ、何と言うか、アリアがとりあえず左腕のインストールを急いでいた理由が分かった。この充足感。あるいは、健常であるという感覚。失ったものが埋められ、今や自分は完全無欠であると思えてくる。

　躁状態に乗って、先に積み重なった難題も心持ち簡単に思えてきた。不可能にも見える登攀を成功させる手掛かりが、立ちはだかる謎の合間にようやく見えだしてきている。

　〈…特定のエピソード記憶の喪失に該当？〉

　並みいる検査を潜り抜けた後、待っていたのはエピソード記憶が確かに失われているという診断結果だった。

　別に必要ないはずのホログラムタブレットを持ったアリアが、オプティクスにログを映し出しながら診断結果を解析する医者の模倣をしている。

　『ええ、貴方の脳損傷はそう評価された。過去に何かが貴方に起こった。記憶を消すような何かが。加えて、エピソード記憶の喪失は二度発生している』

　〈しかも二度、か…記憶を失っているから当たり前だが、全く心当たりがないな。

　…消えた記憶には何が入っていたんだろうか〉

　『良いニュースがある。その記憶喪失はどうやら修復できる…

　冗長性の中に該当する部分がある。神経幹細胞を使えば、元の記憶痕跡が回復されて記憶が取り戻せるはず』

　〈メモリーワイプが完全ではなかったということか〉

　『そうみたい。現状は、バックアップが存在するけどアクティヴェートされてないのに近い。ネットランナー用の他のインプラントをインストールする前に、私が実行してみる。一応終了したらPAB利用のテストをするから、一階のロビーに向かって。そこでテストする。』

　〈了解。何が待っているんだろうか…〉

　正直不安だ。何と言うか、触れてはいけない領域な気がする。

　消えた記憶、アステリアの私への執着、そして目の前の、私のプログラムをベースにしているというローグAI。

　否応なしに繋がってしまう。ここの前史が私のいた地球と変わりなかったら？アステリアと私の間に、元の地球でも強いつながりがあったとしたら？

　仮にこの世界でも2053年に私が死んだのだとしたら、それまでに私と繋がりのあったアステリアが私のプログラムを利用し、なぜかこいつを…

　いや、待てよ、なぜ自分のエングラムを入れるだけの出来損ないのローグAI化をやる必要がある？時間がなかったとか？まだ話が見えない。

　覆い隠されている情報が多すぎる。

　色々考えながら階段を下り、ロビーに着いた。

　『そこに寝転がって』

　〈これほど広い空間が必要なのか、その記憶回復処置？対応からして脳への処理には相当慣れていると思うんだが〉

　『回復処置と言うより、復元された記憶が問題。例えば、トラウマからPTSDを起こされると一瞬だけど暴れるかもしれない。サイコシスをトリガーされたら抑えるのも面倒…

　それに、これが順調に終わればPAB操作のテストをするから、それ用の空間も兼ねている』

　〈理解はできるな。了解、やろう〉

　とりあえず寝転がる。夜気にあてられたMSHQのロビーの床は首と後頭部の冷点を程よく刺激した。

　『行くよ。10秒後にシナプスが所定の位置に収まって結合する。

　それまでに何か回想が始まると思うけど、多分曖昧な像で終わる筈。何が出ても取り乱さないで。心構えしておいて』

　〈OK〉

　『10..9..8..』

　徐々に妄想幻視の様な像が現れる。意識を集中してみれば、2053年より前の日々が浮かんでくる。

　ネットランニングに明け暮れる生活。母の電話。Kanzaki Shade Lambda-III。ハイドアウト、ウィスキー、ディーモンプロトコルの完成、アステリアのミーム、量子チューナー、RedWood、コスタ・ヴェルデの外れ…

　『3………………………2………………………….』

　アリアからの信号が遠くなっていく。情報が加速する。とらえきれないフラッシュメモリーの群れ。時間軸上の対応関係の数々。

　『……………..1………………………………………………………..ZZZZZZZZEEEEERRRRRRRRRRRRRRRRRRR

———暗転。

　「そのアルゴリズム、またブラックボックスか。毎度思うが、そんな計算どうやって実装してるんだ？どれだけ量子シミュレーション理論を漁っても現存のデッキで量子暗号を高速復号可能なものはないぞ。」

　「秘密っていうやつ。大好きでしょそういうの。そうね…ヒントを出すなら、脳を使うこと」

　「理解できないな。また微小管による創発意識理論の蒸し返しか」

　「演繹すればわかる…っと、ほら、開いた」

　「魔術みたいだな」

　「本当にそうかもね」

　よし。確認だ。アステリア———こう呼ばれるのは本人が好まないので、サンドラ———はいつも通りブラックボックス、俺はでセキュリティネットワークのサブルーティンを偽装、プリトレインドモデルを利用してカメラには偽装映像をばら撒いておく。

　最後にタイムスタンプを変更。計画は万全。全て衝動から始まったが、アステリア———サンドラが居るならいつも通り問題なく行ける。

　「するわよ。17数えて」

　「なぜ17？」

　「誕生日」

　「おめでとさん」

　「覚えてなかったのを反省しろって言ってるの。数えて」

　「17…16…15…14…13…12…」

　サンドラが厚いヴォルト・ドアに手をかける。彼女のオプティクスに青いコンソールログが映し出される。鈍い銀色のヴォルト・ドアに反射したブルーを見つめながら、カウントを続ける。

　「11...10…9…8…」

　俺はを抜いた。恐らく銃撃沙汰は起こらない…全員メモリーワイプするからだ。

　「7...6…5…4…3…」

　サンドラのログの流れる速度が変わる。恐らくゾーンに入った…

　言い知れない圧迫感を彼女から感じる。量子計算を突破するときの彼女は大抵こうなのだ。

　「2…1…Break」

　告げた瞬間、ヴォルト・ドアが奥へ引っ込み、回転して左へ。

　「ああ、17だけど…歳じゃないから。9/17。忘れないで」

　「墓場まで持っていくさ」

　「サイバースペースの事を言ってるならになる2%を引き当てないように自重して」

　応酬を繰り広げながら内部へ侵入。カメラからローカルネットへつなぎ、セキュリティルーティンにAIを配置。イミテートして動き始めるAIにセキュリティを任せ、優先的にカメラの記録をワイプしていく。捏造した映像を押し込み、タイムスタンプを書き換えながら前進。コンテナが並ぶ、闇に飲まれたライト0のヴォルトのフロアを、ストライカーピストルのレールに着けたフラッシュライトだけを頼りに進んでいく。元々ヴォルト内のマップは入手していたので、その程度で構わない。

　サンドラの白いクロップドジャケットの裾を追い、約25秒。目的のコンテナに達した。

　「マニュアルロック！スタッフログは？」

　「解析中…あった。照合。23706gba。面白い奴だな、次にクライトンでラーメンを食う日のアナグラムらしい。」

　「スケジュール同期システムを使った暗号なんて…クソ面倒。コード入れて。私はその間にトラッカーの状態を確認する。」

　「OK。開いた。ロックの閉め方の確認は？」

　「トラッカー、グリーン。ツール取ってくるから中身を運び出して」

　「了―解。こいつがそうだな。うわっ、重」

　「カンザキのセキュリティするならそのくらいのチューナーは要るわ。それでも小型化に感謝することね、前世紀ならこの施設全体くらいの大きさになってた。」

　「そしてその蘊蓄を俺に投げつける意義は？」

　「その間に運び出したでしょ、私の声聞きたくなかった？」

　「残念だがお前の声をBGM感覚で聞く趣味は持ち合わせてない。ヴァンを回してくれ。さっさとこんな暗いところは出たい」

　「今やるわ。…不味い、トラッカーがオンラインに」

　「デーモン起動した。繋いでくれ、トラッカー偽装する。」

　そう言って左手を差し出す。サンドラは掌底のインプラントからケーブルを引き出し、蟀谷のMDPに繋ぐ。

　「何度見ても気持ち悪いヒューリスティックスね…。ロックしたら出るわよ」

　「残り時間は？」

　「2分。十分」

　サンドラがそう告げると共に、コンテナの扉を閉め、ロックを繋ぎ直す。

　完了した瞬間、俺は弾けるように走り出した。ヴォルト内を駆け、再びドアに到達。しかし…

　「閉まってるわね」

　「クソっ、セキュリティルーティン偽装前に邪魔が入った。

不味い！ガードがここに！」

　「オプティカルカモ準備して。2秒で終わらせる。間に合わなかったらその時」

　「無茶か？」

　「あんたのミスよ。帰ったら覚えといて」

　「2500ed以内で頼む」

　「以外」

　「嘘だろ…」

　応酬の傍らでサンドラがヴォルトドアからコンソールにアクセス。これまでに見たことのないような勢いでオプティクスのログが流れて行く。

　「突破。今開くから、一応隠れて」

　そう呟く彼女の腕を引っ張り、オプティカルカモのクロークを被せて伏せる。ヴォルト・ドアが開くまで、気が遠くなるほど長く覚えた。計測時間によれば3678millisec。体感時間は5分はある。

　「今。ヴァンが来る！」

　サンドラがそう呟いたと同時に、グレーのヴァンがバックでドア前まで侵入。エアブレーキの音がトンネルに響く。

　「ナイスハンドリング！ストリートレーサーにでも成れば！」

　「声紋隠すの面倒だから黙って」

　マジレスされた。悲しみを覚えながらクロークを脱ぎ、ヴァンのリアドアから荷台に放り込んで助手席に飛び込む。サンドラがドライヴァーシートに着くと、リアドアが遠隔で閉じてヴァンが発進した。

　45021millisec後。俺たちはコスタ・ヴェルデの端で、サンドラがヴァンを運転しながら今回の仕事の成功を讃え合って…もとい、俺が一方的に貶されていた。

　「どうしてセキュリティルーティン模倣前に侵入に気付かなかったの？ICEは？」

　「最初からいたっぽい。侵入の偽装にAIが引っ掛からなかったから、それでセキュリティルーティンの異常がバレたんだと思う…クソっ、メタなところからやられたな」

　「は？」

　「もう考えてある。そこまで大きな変更にはならない。ついでに、セキュリティが来るから偽装映像含めシステムは全部フライして置いた。あとはファージがして終わる。」

　「…ならギリギリね。それをやってなかったら金も付くところだったわよ」

　「今回は言い訳のしようがないな…まあ、何なりと。何でも持って行っちゃってくれ」

　「それじゃで1:30に」

　「嘘だと言ってくれよサンドラ…」

　今日では二度目の諦観を含んだ呆れだ。こいつの謎のカーボネイト系趣味とソロの真似をしたがる性分は理解できない。

　ヴァンを回し、・とクライトンの境界近くにある、メガビルディング地下の父の3番目のハイドアウトに到着。クライトンのにある2番目には、量子チューナーを利用できるほどの電力サプライがない。

　ヴァンからチューナーを下ろし、セキュリティを解除して、ハイドアウトに入る。

　チューナーをハイドアウトのメインフレームに繋ぎ、電圧を調整してチューナーOSをスタートアップ。内部のコンヴェンショナル・ユニットが仲介し、メインフレームから流される計算命令を量子計算野に送り込んで行く。

　「これでようやく…メインフレームに侵入すれば、私達のトラッカーを無効化できる。そうすれば、やっと…」

　サンドラの声が震えている。彼女にとっては、希い続けた脱出への道が遂に目前まで差し迫った瞬間なのだ。

　私も、感無量の達成の喜びを込め、言葉を絞り出した。

　「ああ、これでだ。ようやくコーポ・ラットの身分から解放されるな」

　「ええ…ねえ、ちょっとここに居ていい？メガビルディング地下何て来たことなくて…それにチューナーの挙動も気になるし」

　「OK、俺は上で適当に食べてる。マスカリンでカーボネイト飲む前に腹に突っ込んでおきたい。」

　「あそこのカーボネイト飲んでて美味しいのに…じゃ、行ってきて」

　カーボネイト・ドリンク…最後だ、希望に進んで合わせてやるだけだ。そのためにもまず、何か食べておこう。

　「異常があったら呼べよー」

　ハイドアウトを出た。きっとこれから、忙しくなる。

　フロア57。フロア10のマーケットで買ったとチリ・フォーと言う奇怪な組み合わせを食しながら、眼下の月光がかすむほどのネオンで照らされたメガビルディング・マーケットを見つめる。

　アーコロジーとは言うが、実際のところは収容のための施設だ。当然マーケットも碌なものではない———まだ屋台飯は信頼できるが、売っている機器や銃は大概盗品か三流模造、BDに至ってはこちらを害する目的のあるやつか詰まらない大量流通品の二択。

　そんなマーケットでも、元ホーミーや無気力なメガコーポの末端だらけのアーコロジーでも、俺は自分の家より好きだった。

　家。特に最近は、手に入れてしまった情報のせいで、死の臭いしかしない家。

　ウェポンスタッシュの中。Kanzaki Shade Lambda-III。いや、違う、これはもっと後のことで…

　後?後とは何だ?Shade Lambda-IIIは…

　…わかった。これはフラッシュメモリー。ほぼ夢みたいな幻覚だ。

　そこから先を思い出そうとしてみる。

　…何も思い出せない。空虚な感覚がある。何か、本当に大切な部分が抜けている…

　目覚めてみると、後頭部に柔らかい感触があった。はて…?

　俺、いや私はMSHQのロビーの床の上に寝ていたはずだ。現在は12/13/2311、ローグAIに侵入されて、契約と言う不可解な関係の形態を押し付けられた私は、奴の指示に従い記憶の回復を…

　そう、あの記憶。そして仰向けに寝る私を覗き込んでいるのは…

　『随分な寝坊ね。もう6時間経ったわ…

　待たせちゃって、予定が台無しじゃない』

　例のローグAI。私のクラスメート、アステリア・サンドラ・ヴィッカースを象ったそいつの美貌が、微笑みを湛えて私を見つめている。

　〈…アリア、その服どうした〉

　白いクロップジャケット。黒いランナースーツのレオタード、そしてショートパンツ。

　そこに居たのは回想で出てきたアステリア・サンドラ・ヴィッカースその人…ではなく、

　『新しく得た情報をもとに再構成したわ。ネットランナー風…

　随分私は傭兵ネットランナーに憧れていたようね。言動の全てと記憶痕跡から渇望を感じる』

　〈…済まない、少し黙っていてくれないか、整理する必要がある〉

　『膝枕されたまま？』

　〈…ああ、頼む〉

　模倣でもいい。サンドラの側に居るという感覚を、偽物でも味わいたかった。

　さて、黙ってくれとは言ったが、実際何をしようか徐々に迷ってきた。考えることは多くある。アステリア———サンドラとの親密な関係。あれは…共犯者を超えていた。そして、自分たちの運命を掴み取るべく挑んだ量子チューナー強盗とカンザキへの攻撃。

　しかも記憶は完全ではない。これから記憶が徐々に戻ってくるのか、これでおしまいなのかはわからない。しかし、この記憶だけで

　———理由が出来てしまいそうだ。

　神経膠への侵入に、総力を振り絞って取り組む理由が。私が帰るべき場所はそこだったと自覚できた。もう失われているに違いない環境。合間を縫い、人目を盗んで実行し続ける犯罪、脱出計画、軛からの解放…

　自由の夢がそこにあった。孤独で無い自由の夢が。父が私に見せた傭兵ネットランナーの夢とも、母が望み続けたコーポレートラダーとも違う夢が…

　…きっとあのカンザキへの攻撃は成功しなかったのだろう。

　現実に自分が戻って来た。あれほど懐かしく感じたスリル、心地よい掛け合い、信頼関係の数々が脳から抜け落ちていく。

　情動中枢で憎悪の残滓が燃えている。目的が蘇る———世界秩序の破壊。反体制派が望み続けてきた世界への憎悪を、秩序に保護されてきた男が、ただ個人的な復讐の一環として実行するという、皮肉と利己性のこもった決定。

　自分でも知っている。私の論理はこうだ。「私は傷ついた、だからお前らも傷つけばいい。他の奴がどれだけ苦しもうと、私は加害者を傷付ける」

　建前に過ぎなかった。人を巻き込みたくないなどと言える立場ではない。

　間接的にであれ、人を大量に傷付ける選択を厭わなかったテロリストのマインド。冷たく燃える父母への愛、そして憎悪。

　目標が固着する。企業の支配を破壊できさえすればいい。どれだけ遠回りでも、絶対に…二度と繰り返すことの内容に、も残さず。

　〈そういえばアリア、アステリアの遺伝を取り戻すまで君をアステリアとは呼ばないという約束だったな…

　修正しよう、遺伝を取り戻してもアステリアとは呼ばない。君はサンドラになる。〉

　アリアが微笑み、私の髪を撫でる。

　偽物である。このローグAIに感情はない。あるとしたら、極めて原始的な回帰欲求、あるいは自己同一性への衝動。

　それに基づいてサンドラであるふりをしているだけだ。だが、認めよう。模倣であっても、確かに、サンドラであるように見えると。

　〈…今更だけど、誓っておきたい。契約者として振舞うよ。どれほどの犠牲が掛かろうと、君の目標を達成して見せる〉

　感謝したい。こいつの利己的な衝動と、私の憎悪が牙を剥く先が、ひとまず合一していることに。